

ASEAN グローバルプログラム に参加して

橋本 和佳
Waka HASHIMOTO
数理情報学科 2年

1. はじめに

2019年8月27日から9月5日にかけてベトナムのハノイ及びシンガポールに滞在し、企業訪問やハノイ工業大学でのPBL活動、南洋理工大学の見学、ビジネスパーソンとの交流会ならびに講演会を含むASEAN グローバルプログラムに参加した。下記の表1は今回の具体的なプログラムの日程を示している。本稿ではこのプログラムに参加した目的、ハノイ工業大学生とのPBLについての研修内容に加えて、プログラムを通じて学んだことや得たもの、それを踏まえた上での今後の課題について記す。

表1 プログラムの日程

8月27日(火)	ベトナム入国, オリエンテーション
8月28日(水)	栄光堂, Rikkei Soft 訪問
8月29日(木)	ハノイ工業大学にて現地大学生との PBL 活動
8月30日(金)	
8月31日(土)	民族記念博物館などの観光及び自由行動
9月1日(日)	シンガポール入国, WASABI CREATION 講演会
9月2日(月)	南洋理工大学見学
9月3日(火)	Google 訪問, ビジネスパーソン交流会, 加藤順彦氏講演会
9月4日(水)	自由行動
9月5日(木)	帰国

2. 参加目的

今回のプログラムに参加しようと思ったきっかけは、保守的な若者が増えているという現状を知ったからだ。私自身もその若者の一人に含まれていると

いう自覚があり、その状況をどう抜け出すかと考えた際に何か新しいことに踏み出し活動することで、自分自身が少しずつ変わっていきけるのではないかと考えたからである。また視点を変えることで見えてくるものや、得られるものがあるように、海外に出て普段とは異なる環境に身を置くことで、見識を深めることができる良い機会だと思ったからである。

3. 研修内容

今回の様々な研修においてメインイベントといって過言ではないものが、ハノイ工業大の学生と一緒にいったPBL活動である。この活動が本研修の中で最も学びが大きかった為、以下に詳しく述べる。ここでは日本の菓子メーカーである栄光堂の「塩レモンキャンディ」を、ベトナムでヒットさせるための提案をする、という課題が与えられた。商品の売上増加の為の販売戦略を立案し、その内容をプレゼンテーションして栄光堂社へ提案することがプロジェクトのゴールであった。短期間でゴールを目指す為、渡航前に事前学習として2日間、戦略の立案に向けて仮説を考案し、それが正しいのか、あるいは間違っているのかを確かめるためのアンケートを作成した。ここで作成したアンケートに関する調査は、ハノイ工業大学のキャンパス内にて行った。

この調査を行う上で一番苦勞したことは、やはり英語を使ってベトナム人学生たちとコミュニケーションをとることだった。多くの人が海外に出て始めにぶつかると思われる言語の壁に、私も例外なく打ちのめされた。具体的には、現地の大学生を対象とした調査をする為、私たち日本人学生が事前に英語で作成したアンケート項目をベトナム語に訳してもらわなければならなかったが、アンケートの内容を同じチームのベトナム人学生たちに思い通りに伝えることができず、言葉を発することに抵抗を抱いてしまった。ベトナム人学生は皆とても英語が流暢で、それに対して私の英語力はひどいものだったことも理由の一つに挙げられる。だが弱音を吐いても何も解決せず、プロジェクトを終わらせることはで

きないので、自身の知っている英単語をなんとか使いながら相手の言うことを聞き取り、理解するようにした。最後まできちんとした英文を使って会話することはできなかったが、単語を並べ、ジェスチャーを交えながら伝える方法で推し進めていった。

調査により立案した販売戦略は、栄光堂社へと提案する前に、ベトナム人学生と一緒に中間報告として、大学キャンパスにて英語でのプレゼンテーションを行った(図1)。仮説の検証とそれに基づいた戦略の立案を、時間内に班員全員の意見を汲み、擦り合わせた上でまとめるという作業は、極めて難しいものであった。日本語での意思疎通も儘ならないのだから、英語でのやり取りなど上手くいくはずもなくとても苦勞した。しかし、発音が悪いなどの様々な理由で一度や二度では伝わらなかったが、根気よく伝えようとすることを諦めなかったので、僅かだとしてもメンバー一人ひとりの意見を反映した内容になったのではないかと考えている。

英語でのプレゼンテーションにおいて、ベトナム人学生たちは読み上げるための原稿を作らないということに気づいた。時と場合によるだろうが、今回に関しては作成した模造紙を見ながら英語を使って発表を行っていた。これに対して私を含む日本人学生は英文の原稿を作り、それを見ながら読み上げる発表をする事しかできなかった。これも英語力の差が現れた如実な例ではないだろうか。海外の人たちと共同で作業し、課題に対する提案を作る一連の流れを体験し、グループワークや英語でのコミュニケーションを行う上での課題を多数見つけることができ、とても良い機会であったと感じている。



図1 PBLの中間報告終了後の様子

4. おわりに

このプログラムに参加して明確になった課題は、第一に英語力の向上である。小中高と大学入学後も加え、およそ10年に渡って英語教育を受けてきたにも関わらず、全くもって教育の成果を発揮できなかった。理由としては大半がインプットのみの教育であったからだと思われる。英語を聞き取って理解し、英文を読む能力は一般的には高い。一方で、アウトプットの練習を全くといっていいほど行って来なかった為に、自身の考えを英語で相手に伝えることは大変不得手である。従って、今後はアウトプットに重点を置き、英語で会話することができるようになるという目標を掲げて、英語力の向上を進めていきたい。加えて、グループワークで必要となる協調性や発言力などを磨くこと、広い世界に目を向けること、能動的になることなどを含め、多くが今後の課題となった。

最後に、プログラムに参加させて頂けたこと、関わって下さった方やお世話になった方々への感謝の意をここに表す。